
ワイルドと宗教

内山 正平

(元早稲田大学教授)

Wilde の中で宗教はいかなる相で存在していたでしょうか。その判断は彼の全作品から汲みとり、総合して下さざるを得ませんが、彼はクリスチャンでは無かった、とは云い得ないにしても、月並のそれでは無かった、とは言えます。

彼を作家として初めて認めさせた作品は *The Happy Prince* を含む 5 篇の童話集です。これは 3 年後に出版された *A House of Pomegranates* の 4 篇と共に珠玉の童話で、Wilde の名が忘れられることがあっても、いつまでも読者を失わぬ名品で、9 篇の童話に盛られているのは崇高なキリスト教の精神です。ところが *The Happy Prince* を公けにした二年後、彼は *The Picture of Dorian Gray* を発表しました。当時の英社会の大多数の人々は驚きました。前者では、人々は彼を生真面目な信者と思ひこんでいましたのに、後者は敬虔な信者では到底書き得ない内容を持つ作品だからでした。それだけに、彼に対する世人の反撥は強烈でした。我々は何れが真の Wilde と判断すべきでしょうか。

彼はパリのわびしいホテルで客死しました。死の床で彼はプロテスタントからカトリックに改宗した、とされています。死に際に尚宗派を云々する程の気力があつたか否かは大変疑問で、改宗もその節万端の世話をした André Gide 達が葬儀をする都合上とった非常手段だった、と考えた方が妥当でしょう。

Wilde が童話の中で謳い上げた宗教的理想は終生彼の心に深くひそんでいたに違いありません。だからこそ、彼は因習に囚われ過ぎ、その形骸にすがること甘んじていた当時の英社会、特に宗教界を露骨に非難したのだ、とも言えます。

しかし、実際に彼をあやつっていた心情は単純ではなく、その主要部は *The Picture of Dorian Gray* や Drama に登場する人物達が示すようなものであった、と確信します。

彼が宗教界に浴びせかけた痛烈な皮肉、擲論のことばの代表的なものを拾ってみます。

Religion is the fashionable substitute for belief.

.....

A bishop keeps on saying at the age of eighty what he was told to say when he was a boy of eighteen, and as a natural consequence he always looks absolutely delightful.

(*The Picture of Dorian Gray*)

これに似たことばは他の作品の中でも数多く見受けられます。我々には愉快的戯言と聞えますが、当時の一般の人には、許し難い暴言としか受けとれなかったのです。我々は Wilde の時代の英国人とキリスト教との関わりの密接さを見失つてはなりません。彼等にとって、信仰と生存とは同義語でした。僧侶はことある時に神と人々の間にあって仲介の

劣をとる尊い人であり、神の傍にいて、神に次ぐ人で、彼等のチーフは神に代って国王を任命する役を勤める偉い人だったのです。従って、キリスト教の信者であることをからかったり、僧侶を小馬鹿にする言動などを許さなかったわけです。こうして、彼は一部の好事家にもはやされると同時に、多くの人々から危険人物と見られるようになりました。

更に彼の立場を悪くしたのが『サロメ』です。クリスチャンならば誰でも、この劇がマタイ伝の第十四章、マルコ伝の第六章に題材をとっている、とすぐ気がきます。ところが彼は聖書の内容を改竄^{カウ}しています。聖書では、王妃がヨハネに不倫をなじられて激怒し、王女が王の誕生日に見せた踊りを王が絶讃して望みのものを興えると公言したのを利用し、王女にヨハネの首を所望させた、となっているのを、Wildeは王女サロメが、かなわぬ恋の怨みをはらす為の所業にすり替えました。

言うまでもなく、聖書は神の子イエスの訓えの記録で、信者にとっては不磨の聖典であり、神そのものであり、これを改竄するなど、許されぬ大罪でした。彼は大多数の英国民から異端者扱いをされるようになりました。彼がクイーンズベリー侯との間の訴訟に敗れた事件の背景には、このような民衆の宗教感情があった、という点を無視できません。

De Profundis は彼の死後の世評に大きな影響を与えたわけですが、その中に、民衆の彼に対する敵意を倍加させる箇所が幾つかありました。

I see a far more intimate and immediate connection between the true life of Christ and the true life of the artist:.....

I had said of Christ that he ranks with the poets. That is true. Shelley and Sophocles are of his company. But his entire life also is the most wonderful of poems.

現代の我々には極めて興味深い解説と論評であると納得できますが、これ等もまた当時の信者を怒らすに足ることばでした。キリストは神の子です。詩人や芸術家は、いかに名声ある偉大な人であっても所詮は人間です。キリストを人間と同列に論ずる人を、当代の英国人は許しませんでした。

Wildeの真価が一般人にも認められるようになったのは、死後半世紀を経てから、と考えて差支えないでしょう。二度の大戦争に苦しんだ経験と科学の進歩が重なり、人間のアタマが宗教に対して柔軟になってからです。彼の母校 Magdalen College 当局も、在世中は送られる著書を全て見向きもせず、死後も長い間大学の関係者は彼を校友とは言わないようにしていた、と聞きます。これも、当時の英社会で彼がいかに排撃されていたかの証左です。

要するに、Wildeの本心がどうであれ、今日の我々ならば狂信者と呼び得る信者が充満している社会にあって、彼は殊更に民衆を挑発するような態度を、それも、いかにもデカダンの代表者らしいことばをつらねた作品によって如実に示しました。彼が社会から追放されるのも当然だった、と言えます。